

# わがまち矢野のいま昔

～伝統産業「髻(かもし)づくり」と「かき船」を中心に～

講師 「発喜会」会長 楠精洲 先生

## 矢野の伝統産業「かもし」づくり

### (1) 髻 (かもし) とは

女性が髪型をととのえるために、中に入れこんだり添えたりする髪の毛をいう。

### (2) 矢野「<sup>かもし</sup>髻」の創始者 (創業伝承による)

江戸時代初期、寛永年間 (1624～1643年)

大阪屋 (大官田) 吉兵衛

※墓石

写

### (3) 製造方法 (作業工程)

- ・ かもしの原料・・・「玉髪 (たまげ)」「毛たぼ」(抜け毛の廃物利用)
- ・ 油抜きをする・・・粘土 (ひげ土、黄色土)、蒸し上げ  
※かもしの里マップ (「ひげ土」土取り場)
- ・ 解き揃える・・・マンガンに通し金櫛 (かなぐし) で解きそろえる。  
できあがった粗製品を「角紗」(かくさ) という。

下職

※<sup>したしよく</sup>下職までの仕事は農家が副業として各製造業者から「<sup>たまげ</sup>玉髪」を<sup>したしよく</sup>あずかり<sup>なや</sup>請負制度でおこなった。<sup>したしよく</sup>下職の仕事場を「<sup>なや</sup>ひげ納屋」という。

道具

写



## ・着色

- ① 染料釜にヘチマンを入れ蒸す。これにより黒色が濃厚となる。
- ② これにローハ（硫酸鉄）を割り入れて再び蒸す。着色止め。
- ③ 川水で洗い、土や塵を除去する。
- ④ 苛性ソーダにひたし光沢をつけ、消毒する
- ⑤ 川水で洗い、直射日光で乾燥させる。
- ⑥ 最後につづれを解き、数種類の長さの規格に揃える。（「引きじ」「抜きじ」）

・販路 日本各地のほか、欧米各国へ輸出

## （４） 矢野髭（かもじ）の歴史的なあゆみ

- ・ 1886年（明治19年）第1回国内勸業博覧会に、初めて髭を出品。
- ・ 1902年（明治35年）大阪府主催・第5回国内勸業博覧会にて、矢野のかもじは「全国唯一」の名声を博す。
- ・ 1904年（明治40年）7月未曾有の大水害にみまわれる。「向う四ヶ年の節約」の達し。髭業は非常な苦境におちいる。 ※水害之碑
- ・ 1915年（大正4年）第一次世界大戦により、軍需品や日用品の需要が激増し景気が好転。中ごろより日本の輸出はすごい勢いで伸び始める。この年5月、大官田吉兵衛が産業功労者として、県知事より追賞される。これを機に10月、「髭之碑」を尾崎神社北麓に建設し、除幕式が行われる。 ※髭之碑
- ・ 1917年ごろ 矢野の髭が最も名声を全国に高め隆盛を誇った時代であった。
- ・ 1921年（大正10年）ごろ 一時衰退していた髭業が回復。矢野髭市を開設する。これより大正の末まで、全国生産量の7割を占めるにいたり、髭業界は全盛を極める。矢野の住民の八割近くが髭に関わっていたといわれる。（※大正9年 戸数1223戸 男2645人、女2853人 計5498人）
- ・ 1922年（大正11年）4月皇后陛下、本県工啓の際、台覧に供し五点お買い上げ。～このころより昭和12年ごろにかけて、髭製品はあらゆる機会をとらえて出品展示し、宣伝された。～

賞状  
銀杯

写

- ・ 1923年（大正12年） 関東大震災  
久邇宮殿下、厳島神社御参拝の際、台覧に供す。  
支那朝鮮貿易品展覧会に出品。
- ・ 1924年（大正13年） 京都市主催博覧会に出品。
- ・ 1925年（大正14年） オカッパに帽子スタイルが当時の女性のトップモードとなる。
- ・ 1926年（大正15年） 皇太子殿下、中国行啓の際七点を台覧に供し四点お買い上げ。  
※「通知状」
- ・ 1927年（昭和2年） 金融大恐慌  
東京博覧会、東亜勸業博覧会、岡山県物産品評会、福岡県主催  
大日本勸業博覧会、広島県陳列館内生産品展覧会に出品。
- ・ 1929年（昭和4年） 広島市主催「昭和博覧会」にかもじ65点を出品。  
朝鮮博覧会、中国四国五県大博覧会に出品。  
しかし需要は大幅に減少。
- ・ 1930年（昭和5年） 11月、天皇陛下本県行幸の際、天覧に供し、二点お買い上げ。
- ・ 1931年（昭和6年） 北海道庁札幌市商工会議所主催、国産振興北海道拓殖博覧会に  
出品。
- ・ 1933年（昭和9年） 8月髷の洗浄場改築工事竣工。今でも、矢野橋の下、極楽橋の  
たもとに原型をとどめる。 ※かもじの洗い場  
大阪府立貿易会館における全国特産品見本市に出品。
- ・ 1935年（昭和10年） 呉市主催国防産業博覧会、横浜市主催復興記念横浜大博覧会に  
出品。
- ・ 1936年（昭和11年） 博多築港記念大博覧会、富山市主催日満産業大博覧会、広島県  
産業奨励館における広島県振興産業博覧会に出品。
- ・ 1937年（昭和12年） 東伏見宮妃殿下の台覧に供す。  
日華事変勃発。日本髪からパーマ・ウェーブなどの  
断髪の洋風スタイルに移行。髷の需要が次第に減少していく。
- ・ 1939年（昭和14年） 第二次世界大戦に突入。戦時体制となり、あらゆる物資が配給  
制となる。生産に必要な、染料、石油、綿糸、カセイソーダ、  
針金、釘、漆、速乾ニス、硫酸鉄、ヘチマンなどの入手が困難  
となる。

- ・ 1941年（昭和16年）太平洋戦争はじまる。このあとも細々と生産は続けられるも、戦争末期には完全な生産麻痺状態となる。  
（昭和初期には、半製品の髷から、かつらの製造の技術の方にウエイトが移り始める。）
- ・ 1945年（昭和20年）太平洋戦争終結
- ・ 1952年（昭和27年）4月 郷土産業としての髷業再興を祈願して「第1回かもじまつり」が中学校グラウンドで催される。
- ・ 1964年（昭和39年）ごろ 新型部分かつら（ヘアーピース）の需要高まる。製造業者30軒以上、内職者数1000人以上と推測される。
- ・ 1967年（昭和42年）ごろ 沈滞から一変して急激な活況を呈す。家内工業的な経営から、会社組織に変わり経営規模も大型化してゆく。  
～昭和40年代が戦後の髷産業の「黄金期」～
- ・ 1973年（昭和48年）石油ショック 大手メーカー進出や東南アジア方面の低賃金による廉価なものが出て、販売競争が熾烈化する。
- ・ 1975年（昭和50年）3月矢野町が広島市と合併。  
低成長経済に突入し、髷産業も衰退。転業、廃業を余議無くされていく。
- ・ 1991年（平成3年） 広島県が郷土広島伝統的工芸品として「矢野かもじ」など九品目を指定。

## （5）矢野「髷」の今・・・

- ・ 洋かつら 「クスノキ」、「ゆうわ」
- ・ ガン患者への、かつらの寄付運動  
2001年医療用ウィッグ無料  
直営店KSNOK 'S（クスノクス）6店

# 矢野の伝統産業「カキ（牡蠣）養殖とカキ船」

## (1) 矢野の海と滞（みよ）

## (2) かきの養殖法の変遷

いしましき

① 石蒔式養殖法 海中に岩石を投げ入れておき、カキのついた石を集めて干潟で養殖する。寛永年間（1624～44）に始まったといわれる。

じまき

② 地蒔式養殖法 カキを干潟の砂の上に直接置いて、生育を待つて収穫する方法。

③ ひび立て養殖法 竹や雑木を干潟に立てカキを付着させ、生育を待つて収穫する方法。収穫までそのまま養殖する方法と、途中でカキを落として地蒔養殖を行い収穫する方法がある。17世紀初期から昭和初期まで約300年間おこなわれたといわれる。

★矢野大井・和泉（灘）源蔵、寛永4年（1627年）

ひび立て養殖に成功「矢野かき」の祖

くいうちすいかほう かんいすいかほう

④ 杭打垂下法（簡易垂下法）

干潟に、高さ1m30～40cmの棚をつくり、これに貝殻と竹の管を交互に通した連をぶらさげ、カキを付着させ、生育を待つて収穫する方法。昭和初期から昭和30年ごろまで行われた。

いかだしきすいかほう

⑤ 筏式垂下法 干潟の棚ではなく、筏に、カキの種がついている貝殻と竹やビニールのなどの管を交互に通した連をぶらさげ、生育を待つて収穫する方法。孟宗竹で作った筏は風や波に強く、製作費も安かったので昭和28年頃から普及し始めた。これにより、漁場の沖合化を可能にし、漁場面積が拡大、生産量も飛躍的に伸びた。

★ 矢野川河口（昭和30年ごろ～平成初年）

「筏」組み作業場・・・矢野川のしも手

※昭和25年頃 かきひび 大井一大浜海岸（かき筏になる前の風景）

★矢野川の水利用 ①農業用水（上流） ②生活用水（町中）

③産業用水（下流）

昔・・・上流での水車、かもじの洗い場、かき筏

### （3） 矢野の「かき船」

「矢野浦のかき船の数は多く、その昔カモジ売りが全国を売り歩きながら、手引きをした物語」が伝わる。かもじの販売・行商で、各地の必要とする商品の情報を得ていたというのである。矢野のかきとかもじとの関連性は、密接であった。

- ・ 10月初旬秋祭り頃から翌年4月春半ば頃まで
- ・ 乗組員（親方、船頭、船方、料理人、出前、給仕人等、10人程度）



・ 明治以後から昭和の中期 やのかき船全盛期

墨絵

大阪「吉兆」、「かき伊」、神戸「かき十」、和歌山「かき惣」、  
倉敷「かき増」など

★ 転業（業務替え）・廃業 ⇒ 船が陸（おか）へあがる。

#### （4）かき料理のお品書き

御客様 おきやくさま	錢上希で御願ひ申し上満春 せんあげ おねがい もうしあげます	段ですから御一人前分は五 だん おひとりまえぶんご	但志右ハ二人前以上之御値 ただしし みぎはににんまえじょうのおね	一 御酒 おきけ 参拾銭	一 菊正 きくまさ 参拾五銭	一 お津ゆ つゆ 拾銭	一 花楚う水以 はなぞ すい 四拾銭	一 蠣め志 かきめし 四拾銭	一 貝む志 かいかい 貳拾五銭	一 和左び阿ゑ わさあ 貳拾五銭	一 奈多ね なた 貳拾五銭	一 フライ ふらい 貳拾五銭	一 玉子登志 たまごとし 貳拾五銭	一 寿がき す 貳拾銭	一 可ら満む志 かまむし 貳拾五銭	一 乃里巻 のりま 参拾銭	一 天婦ら てんぷら 参拾銭	一 オムレツ おムレツ 参拾銭	一 巻きやき まき 参拾銭	一 土手やき どて 参拾五銭	舌代 したたい
---------------	-----------------------------------	------------------------------	-------------------------------------	-----------------	-------------------	----------------	-----------------------	-------------------	--------------------	---------------------	------------------	-------------------	----------------------	----------------	----------------------	------------------	-------------------	--------------------	------------------	-------------------	------------

※戦前和歌山市で営業していた牡蠣船の品書額より

#### （5）かき船は今・・・

広島市中区

(資料作成 矢野公民館)

この資料は、発喜会、楠精洲氏のご指導ご協力を得て、矢野公民館が作成したものです。  
資料を作成するにあたり、以下の文書を参考、抜粋させていただきました。どうもありがとうございました。

- ・発喜会「発喜山」より「矢野かもじ考 武田敬造」、「かき船繁昌記 浜尾卓次」
- ・広島市郷土資料館「学習の手引き 第5号 かもじづくり」パンフレット
- ・広島市郷土資料館 資料解説書 第10集「牡蠣養殖」
- ・広島市郷土資料館「越中の人東林<sup>とうりん</sup>さんが食した広島カキ料理」パンフレット
- ・(財)広島市水産振興協会「かき養殖 海辺の教室」パンフレット
- ・発喜会「郷土史講座 第四回 矢野の産業(その2)かき・かき船 テキスト
- ・発喜会「今昔の感～矢野町今昔写真手帳～」